幼馴染みなんかじゃない…

長月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼馴染みなんかじゃない…

【Ｎコード】
Ｎ０１９２Ａ

【作者名】
長月

【あらすじ】
やっと待ち続けていた新一が戻ってきた…というのに結局何も進展のない新一と蘭。一体なんのために待っていたのかと虚しくなる蘭。そんな二人がついにー…

新一が戻って来てから一ヵ月が経った。
この一ヵ月は新一とゆっくり話す事なんか出来なかった…。
何故なら学校に復帰しだしたと思った途端、留年の危機で、一週間前にあった学年末テストで学年一位を取れば留年を免れるという条件でこれまで勉強に明け暮れていたため…。
そして相変わらずの高校生探偵としての警察からの応援要求が途絶えなかったため。
今日も朝から事件だと言って学校に来ていない。
テストで見事学年一位をはじき出し留年の話はすっかりなくなり学校側も探偵としての新一を応援してる。
学生が励むべき事は勉学でしょ？？？何で学校が違う事させてるのよ！！！私はここ最近ずっと機嫌が悪い。
せっかく新一が帰って来たのに話すどころか顔さえまともに合わせていない…。
新一が帰って来たら言ってやろうとしてた事が一杯…い～っぱいあったのに。
これじゃあ今までと同じでまだ新一が帰ってきてないみたいだよ…。
大体新一も新一よ！！あれだけ待っててくれとか言っといて帰って来たと思ったらこれ？？あの大馬鹿推理之介！！私は何のためにあんたを待ってたのよ！！！私達は幼馴染みのまま…少なくとも私はただの幼馴染みだなんて思ってないのに…あ～あ…。
会いたい…。会って話したいよ…新一。
「新一の馬鹿」
私は小さな声でそう呟いた。
今は帰り道。
歩くのさえ苦痛になり近くの公園のベンチに腰掛けた。
するとー…新一が帰って来た日が頭の中に甦ってきた。

あの日は雪が降ってた。
何となく雪に触れたくて外に出て空を見上げながら雪の冷たさを肌で感じていた時…急に名前を呼ばれたの。
「…蘭」
「…え？…！？…しっ…新一？」
「待たせてゴメンな…」
「…～新一ぃ」
私の視界は涙で歪んでいた。
その時突然新一が倒れた。
それからは救急車を呼んだりで大変だった。
病院に行っても私と新一をなかなか会わせてくれなかったし何で倒れたかも教えてくれなかった…。
感動の再会どころじゃなかったなぁ…。
本当は少し期待してた。
新一も私と同じ気持ちをしてるんじゃないかって…自惚れみたいになるのかもしれないけど…でもやっぱりそれは思い違いだったんだろうな。
だって本当に同じ気持ちだったら今頃私たちは只の幼馴染みじゃないはずだから…な～んて、私の勝手な想像だけど。新一にとっては
「待っててほしいっていうのは只のー…」
ＴＲＲＲＲ…
「えっ？？」
新一に貰った携帯が鳴りだした。ディスプレイを見ると見た事のない番号…誰？？
「はい？」
「…蘭？」

携帯から聞こえてきた声は会いたくてたまらない人のものだった…。
「えっしっ新一？？」
「お前、今何処にいるんだ？」
「へっ？あっ公園」
新一はちょっと焦っているような口調だった。
「公園？…高校の近くのか？」
「うん。そうだよ？」
「ずっと其処に居たのか？」
「部活終わってから今さっき来たとこだけど…」
「今さっき…って、お前部活何時までだった？」
「えっ６時半だけど？」
「今何時？？」
新一の口調は焦り気味から怒り気味に…とりあえず今の時間を腕時計で確認した。
時計の針は８時４０分を指していた。そう、８時ー…
「８時４０分～！？」
私は思わず立ち上がり叫んでしまった。
公園に着たのはついさっきだと思っていたのにいつのまにか２時間も過ぎていた。
気が付けば辺りは真っ暗。私、何してるんだろうー…
「ー…ん、蘭！？」
「えっ…ぁ…はい！！！」

自分の今の状況を把握していたら携帯から私を呼ぶ新一の声が耳に届いて慌てて耳元に抱え直した。
「…ったく。とにかく公園に居んだな？今向かってるから其処でおとなしくしてろよ？」

「えっ何で？？」
「バーロ…何でじゃねぇよ。事件解決が思ったより早かったから久しぶりに蘭のアホ面でも見にいくかって思ったら、こんな時間なのに事務所暗いしよ～何かあったのかと思ったぜ？～おじさんもいないのか？」

「なっアホ面って…～お父さんは町内会の旅行中！！！」

「じゃ、蘭今日一人なのか」
「うん」
今思うとこんなに…電話越しだけど新一と話すのは久々…。
新一の声が懐かしく聞こえる。
何か耳に入ってくる新一の声がくすぐったくて思わず笑っちゃった。
「何笑ってんだ？？」
「何でもないよ。」
私はクスクス笑う。
「あんだよ…気になるだろ？ー…あっ！」
急に新一が何かに気付いたような声をしたと思ったら…
「「蘭」」
後ろの方と携帯から同じ声が同時に聞こえた。
「新一！！」
後ろを振り向くと新一がこっちに小走りながらやってきた。
そして私の目の前に来るなり開口一番ー…
「この馬鹿！！」

「なっそんないきなり馬鹿呼ばわりしないでよ！！気が付かなかったんだから仕方ないじゃない！」

「普通周りが暗くなったら気付くだろ？オメー本当鈍いな」

…鈍い？私が！？鈍いのは新一じゃない！！！探偵のくせして私の気持ちなんか全然気付かないで…人の事待たせるだけ待たせて自分勝手にも程があるじゃない！！私はこの一ヵ月間の不満が一気に溢れだしてしまったようだった。

「…何で新一に鈍いなんて言われなきゃいけないのよ！！！それにどうして新一に怒られなきゃいけないの？？別にわざわざ来てくれなくていいっ！」

私は一気に口を動かしてそしてこんな言葉を言ってしまった。

「…只の幼馴染みにここまでしてもらう理由ない」

何言ってるんだろう…私。

只の幼馴染みだなんて思ってないくせに自分がその言葉で幼馴染みっていう見えない境界線を引いてちゃってる。

言ってから後悔したけど謝る気にはなれなくて

「…帰るっ！」

と言って歩きだした。

新一の顔をまともにみれないまま…でも次の瞬間私の腕が凄い力で掴まれた。

「…痛っ！」

という顔をしてその力の先の新一を見上げると私は思わず息を呑んだ。

新一はまるで凶悪な殺人犯を怯ませるような鋭い目付きをしてた。

こんな顔で見られた事ない。

「…はっ放してよ」

ちょっと強気に言ってみたら新一が口を開いた。
「…只の幼馴染みって本心で言ってんのか？」
とても低い声…新一…怒ってる。
こんな新一は初めてだったから私自身戸惑ってしまって新一の問い掛けに答えられず俯いてた。
ー…本心な訳ないじゃない。
只の幼馴染みだなんて思ってる訳ないじゃい。
只の幼馴染みだったらあんなに長い間待ってられないわよ。
待っててくれって言われたからって待てないよ。
新一だから…新一だから待ってたんだよ？その意味判る…？？ーって新一に素直に言えたらどんなに楽か…こんな気持ちを打ち明けられたのも新一がいない間私の側に存在してくれていた一人の少年だけ…。
新一に似たあの少年。
突然私の側から消えた少年。
どれだけ彼に助けられた？？今頃どうしてるの？私が俯いて何も言わない事に痺れを切らしたのか新一が口を開き始めた。
「…俺は…蘭を只の幼馴染みだなんて思ってない」
「…え？」
新一の言葉が理解できずに私は顔を上げて新一の目を捕らえた。
新一はさっきの鋭い目付きとは一転して何処か辛そうだった。
…只の幼馴染みだなんて思ってない…？それってー…
「…しっ」
新一の名前を呼ぼうとした途端…新一に抱き締められた。
「ちょっ…新一！？」
突然の新一の行動に驚き、顔を赤くしながらも抵抗をしてみたけど

…結局無駄だった。
いくら空手をしているといっても男の力には適わない…。新一の力は弱まるどころか強くなる一方…でも私はこの抱擁に次第に安堵感を抱き始めた。

…私はずっとこうして欲しかったの。

ゆっくり新一の背中に自分の腕を回した。
瞬間…脳裏に小さいながら勇敢だったあの少年の顔が浮かんできた。

ー…私が素直になれるよう見守っててね？

「…新一…あのね、私ね本当はー」

そう私が言い掛けると新一に遮られた。

「…いんだ…。蘭は只の幼馴染みじゃないんだ…俺にとってかけがえのない大切な存在なんだ…」

新一の低い声が私の耳元で囁かれる。

目頭が熱くなってくる事に気付いた。「…蘭が好きなんだ。」

熱くなった目頭とともに目から何かが零れた。

「…私…も、私も新一が好きだよ。幼馴染みじゃなくて…一人の男の人としてー」新一が少しだけ私を抱き締めていた力を緩めて二人の間に空間を作った。

「…ただいま。」

新一が得意気にニッと笑って一言そう言った。
私も静かに微笑んでー…

「おかえりなさい。」

その瞬間また私達は抱き締めあった。

今まで離れていた分を埋め尽くすように飽きる程お互いの暖かさを求めた。
随分時間がかかったけど…
まさか近いと思っていた筈の距離がイキナリ遠くなって、連絡さえとれない日々が続くとは思わなかったけど、こうしてちゃんとまた近くにいれる…
今までは気付かなかったお互いの大切さ…
お互いの相手を想う気持ち…やっと一つになれたうれしさ。

これからは只の幼馴染みじゃないんだよね。

幼馴染みじゃないけどずっと一緒にいれる権利を手に入れたんだね

…私達。
もう二度と離れないで…。

（後書き）

こんな駄文を最後まで読んで頂き本当にありがとうございました。
もう少しラストに盛り上がりをつくりたかったんですがいまいち盛り上がりにかけてしまいました。しかもコナンだった事を蘭に打ち明けてないし…次こそは挑戦したいです！もしよろしければ感想おまちしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0192a/

幼馴染みなんかじゃない…

2010年10月19日07時16分発行